

## 新漢語成立史の研究

著者	張 春陽
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	文博第570号
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/00128270">http://hdl.handle.net/10097/00128270</a>

## 新漢語成立史の研究

東北大学大学院文学研究科 言語科学専攻

国語学専攻分野 張春陽

本論は、新漢語の成立、特に、従来の新漢語研究において十分に明らかにされてこなかった具象概念を表す新漢語がどのように発生し、広がり定着したかを明らかにするものである。それにあたっては、具象概念を表す新漢語の成立においてどのような資料が有用であるかということについても検討を加えていく。具体的には、以下を目的とする。

- 第1、 新漢語の成立に関わる資料を系統的に整理し、特に、翻訳によって成立した文献資料とは異なり、これまでの新漢語研究にあまり使われてこなかった具象物の導入及び人的交流によって成立した政府の公的記録類資料及び西洋新文明と直接に接触した幕末・明治期の遣外使節団員の手による西洋見聞録類資料を詳しく整理した上で、そのような資料において、どのような新漢語が見られるかを明らかにする（新漢語研究資料の把握）。
- 第2、 これまでの新漢語研究における個別語の語史研究で十分に検討されてこなかった具象概念を表す個別語である新漢語を取り上げ、それがどのように発生し、広がり、定着したかという成立プロセスを明らかにする（具象概念を表す新漢語の成立過程の解明）。
- 第3、 抽象概念を表す新漢語の成立は翻訳によって成立した文献資料が有用であるのに対して、具象概念を表す新漢語の成立に、どのような資料が、具体的にどのように有用であるかを明らかにする（具象概念を表す新漢語の成立に有用な資料の提示）。

上記のような目的を解明するために、本論は具体的に次のように考察を進めた。

まず、第1部では、従来の新漢語研究を概観し、本論なりの新漢語の定義・時期・分類について整理した。本論は、新漢語の使用を漢字文化圏共通の言語現象と看做すために、それを「従来の漢字文化圏にない西洋の近代文明を導入するために使われている漢語を指すものである」と定義する。その時期を中国における西洋近代文明を導入し始めた16世紀末からと定める。なお、「新造語」と「転用語」の2種類を大きく分類した。また、従来の新漢語の成立に関わる研究にある課題を示し、上に示している本論の目

的を提起した。

第2部では、従来の新漢語研究資料を整理しながら、本論なりの資料分類を行った。特に、これまでの研究において十分に利用されていない西洋見聞録類資料及び公的記録類資料は、本論の研究対象である具象概念を表す新漢語の成立に有用であると想定できることを明らかにした。

第3部では、西洋文明利器 *steam engine* と (electrical) *telegraph* を表す新漢語「蒸気機関」と「電信機」の成立過程を明らかにした。両語とも、近代以前の中国と日本に存在しなく、近代日本で造られた和製漢語である。それぞれの語の成立過程は個別な事象であるが、総括してみると、従来の蘭学者や洋学者の翻訳によって成り立った抽象概念を表す新漢語と異なり、実物の受容に伴い成り立ったのである。また、その成立は、実物の導入に関わる政府（幕府・明治政府）や実物に関する情報を導入した遣外使節団とは多大な関係があることを明らかにした。

第4部では、近代都市建設の過程において、導入された西洋の新文物（具象物）である *brick*（西洋の建築材料）、*lighthouse*（西洋式灯台）、*the water supply system*（近代水道）を表す新漢語「煉瓦」「灯台」「水道」の成立過程を明らかにした。そのうち、「煉瓦」は近代日本で造られた和製漢語である。対して、「灯台」と「水道」は古典中国語に存在し、西洋の新文物を導入するために、新しい意味を付与して転用したものである。この3語も第2部で考察した2語と同じく、蘭学者や洋学者の翻訳ではなく、実物の導入に伴い成り立ったものである。なお、その成立も、政府（幕府・明治政府）や遣外使節団とは多大な関係があることを明らかにした。

第5部では、西洋見聞録類資料及び公的記録類資料を詳細に分析し、それらの、具象概念を表す新漢語の成立における有用性及び位置づけを明らかにした。その中で、西洋見聞録類資料には、従来の日本に存在していない西洋の新事物（具象物）に関する情報が多く見られ、新漢語の生産場と試験場のような存在であり、そこにおいて具象概念を表す新漢語が考案され試行されたということを明らかにした。公的記録類資料は政府の主導によって導入された特定の分野に関わる具象概念を表す新漢語の成立を確認できると同時に、公権力を持つものであり、しかも、実物の導入と深く関連しているため、そこに見られる用語は政府の公的用語として用いられことになる。そのため、実物の普及に伴い、大勢の人に採用されることになった。そこから、公的記録類は新漢語の展開の場と看做されることを明らかにした。

第6部では、上記のような考察過程を纏めながら、次のように本論の意義を示した。すなわち、本論はまず、新漢語研究のための新たな資料である西洋見聞録類資料及び公的記録類資料の価値を提示した。また、新漢語成立ルートとしての直接の物の導入の重

要性も提示した。そして、本論は従来の語彙史研究とは異なり、科学史及び文献史的研究視点を加えた学際的な視点から、新漢語の成立史を記述した。

論文審査結果の要旨および担当者

提 出 者	張 春陽
論文審査担当者	(主査) 教授 大木 一夫 教授 斎藤 倫明 教授 小林 隆 教授 後藤 斉 准教授 甲田 直美
論 文 名	新漢語成立史の研究
<p>本論は、近代日本語における新漢語、なかでも、従来の新漢語研究において十分に明らかにされてこなかった具象概念を表す新漢語がどのように生まれ、展開していったのかを、明らかにしようとする研究である。全体は6部、全13章からなる。</p> <p>序論たる第1部では、まず本論文の対象となる「新漢語」の概念を検討し、従来、曖昧であった当該概念を整理、再定義する(第1章)。その上で、従来の新漢語の研究状況を整理し(第2章)、それらの問題点を検討して、本論文の目的を示す(第3章)。</p> <p>次に、第2部においては、本研究が対象とする新漢語の研究に必要な資料を検討する。従来の新漢語研究は抽象概念を表す語の研究が主であったが、ここではそのような研究では用いられてこなかった資料、すなわち幕末・明治初期の遣外使節団員による西洋見聞録類(第4章)、また、西洋近代文明導入期の江戸幕府・明治政府による公式記録類(第5章)に着目し、その資料の性格を検討する。</p> <p>以上をふまえ、第3部においては西洋文明の利器受容にあたり必要になった具象概念を表す新漢語として、「蒸気機関」(第6章)、「電信機」(第7章)をとりあげ、その語の成立・展開を明らかにする。それらの検討にあたっては、蒸気機関・電信機の受容と定着の歴史を丹念に追いつつ、その語史を精緻に明らかにした。続く第4部においては、近代の都市建設にあたり必要になった具象概念を表す新漢語として、「煉瓦」(第8章)、「灯台」(第9章)、「水道」(第10章)をとりあげている。こちらにも「煉瓦」等の受容史をもとに語の成立・展開を明らかにした。このうち「灯台」「水道」は旧来の語に近代的意味を付与した転用であって、行政的制度とかかわりが深いことも指摘している。</p> <p>以上の個別の語史をふまえつつ、第5部においては、本研究で日本語史資料として開拓した西洋見聞録・行政の公的資料を再びとりあげ、それらの日本語史研究・新漢語研究における有用性と、新漢語史上の位置を検討した。その結果、いずれもが具象概念を表す新漢語研究に欠かすことのできない資料であることを示し、また、西洋見聞録類は新漢語生産の試行の場(第11章)、行政公的資料類は新漢語の展開と定着契機(第12章)であると位置づけている。</p> <p>最後に、結論の第6部では、本論の成果をまとめ、その意義を述べている(第13章)。</p> <p>本論文は、従来の日本語史研究には用いられてこなかった西洋見聞録類・行政公的資料類を積極的に資料として用い、それらを丹念に調べあげて、具象概念を表す新漢語の歴史を精緻に明らかにした。また、新漢語概念の再定義、資料の有用性の検討・位置づけもおこない、近代語研究の基盤の整備もすすめている。この成果は、新漢語研究、さらには日本語語彙史研究に大きく寄与するものといえ、高く評価できる。</p> <p>よって、本論文の提出者は、博士(文学)の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。</p>	